

原 著

# 看護学生の恋愛および性役割に対する態度に関する検討

室津 史子<sup>1</sup> 今村 美幸<sup>1</sup> 藤原 梨江<sup>2</sup> 友安 由貴子<sup>1</sup>

## 抄 録

本研究では、具体的な職業指向が強いと考えられる看護学生が、恋愛や結婚、性役割についてどのような態度をもっているのかを明らかにするために、私立看護系大学生を対象に質問紙調査を実施した。

恋愛態度の4因子の中で「恋愛のパワー」は、男子学生よりも女子学生が、「恋愛至上主義」については女子学生よりも男子学生が高い傾向であった。平等主義的性役割態度については、性別・学年別ともに差はみられず、伝統的な性役割指向が強い者は平等主義的な考えを持つ者よりも恋愛態度のすべての因子について高い得点を示した。

男子学生は恋愛を純粹なものとして捉えて重要視し、女子学生は恋愛をパワーに変える傾向にあり、卒業年次となると社会生活を前にして現実を考える恋愛態度がうかがえた。

**Key words:** 恋愛態度, 看護学生, 性役割

## 1. 序 論

わが国の出生数は、昭和50年以降減少傾向にあり<sup>1)</sup> 少子化が進んだために、国は子どもを産み育てやすい社会の実現を目指し、少子化対策を進めている。出生数に影響を与えるものには、婚姻数や結婚年齢、生涯未婚率の上昇などがあり、わが国では出生する子どもの約98%が婚姻関係にある男女の嫡出子であることから、婚姻関係にない男女は子どもを持ち難いということも出生数に一定の影響を与えていると考えられる。2012年の婚姻数は1972年の6割程度と少なくなっており、少子化による若年者の減少、未婚率の上昇、大学進学率の上昇、独身

者の意識変化など、時代の変化により恋愛や結婚に対する若者の考え方も変化する<sup>2)</sup>。

日本放送協会が実施している世論調査「日本人の意識調査」によると、「人間は結婚するのが当たり前だ」という考え方への賛成は2008年時点で約35%となっており、1993年と2008年を比較すると、15年間で約10ポイント低下している<sup>3)</sup>。こうしたことから「必ずしも結婚する必要はない」という考え方へ同調するものが増加している傾向が見てとれる。

結婚して一人前や、結婚するのが当たり前といったような社会的な圧力が弱まるとともに、結婚が家や親のためではなく個人を中心に据えたものへと変化する中で、結婚は人生の選択肢の一つとして捉えられ、結婚するかしないかについての自由度は高まっていると言える。

また、一括りに若者と言っても、その中にも差が

受稿：2015年12月24日 受理：2016年4月11日

<sup>1</sup> 広島都市学園大学健康科学部看護学科

〒734-0014 広島市南区宇品西5丁目13-18

<sup>2</sup> 広島市舟入市民病院

あり、恋愛や結婚の何を重要視するのかについて大学生と高校生を比較した研究<sup>4)</sup>では、高校生はキャリア意識が強く「愛情」を重視しているのに対して、大学生は高校生より就職を具体的に実感し不安を抱えていることから、男性の「経済力」を重視するといった違いがみられる。

「夫は外で働き、妻は家庭を守るべきである」といった性役割についての考え方も時代により変化している<sup>5)</sup>。このような、時代の変化の中で若者の結婚観や恋愛観を知る事は、出産や育児などに性に関わる支援を行う母性看護において、対象理解の上で重要なことである。

そこで本稿では、適齢期を迎える若者の中で高学歴化が進み職業志向が強いと考えられる<sup>6)</sup>看護学生の恋愛態度や性役割志向について検討し、対象理解の一助とする。

## 2. 目的

適齢期を迎える若者たちの結婚観や恋愛観を知り、母性看護における対象理解についての示唆を得るために、看護学生の恋愛や結婚、性役割に対する態度について検討する。

## 3. 方法

### 3.1 対象

対象者は、A私立大学の看護学科に在籍する学生441名（1年次生112名、2年次生116名、3年次生106名、4年次生107名）とした。

### 3.2 データ収集方法

無記名自己記入式質問紙調査を実施した。授業時間前後の時間を利用して研究の目的と倫理的配慮を口頭および文書にて説明した。回収は、質問紙と共に配布した回収用封筒に質問紙を入れて閉封し、据え置いた回収箱へ投函してもらった。

### 3.3 調査期間

質問紙調査は、2014年7月～8月に実施した。1年生は入学後4か月を過ぎた時期、2年生は専門科目の学習に進みつつ実習を経験する前の時期、3年生は基礎実習を終えて専門領域の実習を前にした

時期、4年生はほとんどの専門科目と実習を終えた時期であった。

## 3.4 調査内容

### 1) 属性

性別、年齢、学年を尋ねた。

2) 和田<sup>7)</sup>の恋愛に対する態度尺度41項目を用いた。この尺度は、恋愛をロマンティックなものとして捉える側面【恋愛至上主義】、結婚を意識させる側面【結婚への恋愛】、恋愛はどんな障害にも打ち勝てるという側面【恋愛のパワー】、理想の恋愛に対する側面【理想の恋愛】という4つの側面を測るものとして示されている。項目はいずれも、「全く思わない」（1点）、「あまり思わない」（2点）、「どちらでもない」（3点）、「ややそう思う」（4点）、「そう思う」（5点）の5件法で回答を求め、単純加算得点をもって尺度得点とした。41項目のうち7項目はダミー項目であり、4項目を逆転項目とした。

3) 平等主義的性役割態度スケール短縮版 (SESRA-S)。この尺度は、鈴木<sup>8)</sup>が作成したもので信頼性および内容妥当性が確認された尺度であり、15項目の質問項目がある。5件法で回答を求め、単純加算得点として15～75点をもって尺度得点とする。得点が高いほど性役割に対して平等主義的であり、低いほど伝統主義的であると判断される。15項目のうち11項目を逆転項目とした。

## 3.5 分析方法

属性については記述統計により分析を行った。恋愛態度尺度については、質問項目の回答をもとに因子分析を行った。次に各因子の下位尺度得点の平均点を求めたのち、各因子について性別および学年別に比較した。性別の比較にはt検定を行った。学年別の差の検定には一元配置分散分析を行った。

平等主義的性役割態度については、質問項目ごとに配した点数の合計点を、性別および学年別に比較した。性別の差の検定にはt検定を用いた。学年別の差の検定には一元配置分散分析を用いた。次に、平等主義的性役割の合計点の平均値をもとに平均点

高群と低群の2群に分けた。恋愛態度の各因子の下限尺度得点の平均点を求め、恋愛態度について平等主義的性役割得点の高低群による2群間の比較を行った。差の検定にはt検定を行った。統計処理ソフトは、SPSSver.16.0を使用した。

### 3.6 用語の操作的定義

#### 1) 恋愛態度尺度

恋愛態度尺度は、特定の他者に対する恋愛感情を測るものではなく、恋愛をどのようにとらえているのかという恋愛に対する態度や考えを測る尺度である。

#### 2) 性役割

性役割とは、男女にそれぞれふさわしいとみなされる行動やパーソナリティに関する社会的期待・規範およびそれらに基づく行動を意味する。

#### 3) 性役割態度

性役割態度は、性役割に対して一貫して好意的もしくは非好意的に反応する学習した傾向とする。

#### 4) 平等主義

平等主義は、それぞれ個人としての男女の平等を信じることとする。

### 3.7 倫理的配慮

①研究の目的および協力に対する対象者の承諾は自由である。②協力の有無による不利益は生じない。③データは個人が特定されないように符号化して統計的に処理する。④得られたデータについては本研究以外の目的には一切使用せず、すべてのプロセス終了後に破棄する。⑤無記名の質問紙であるため提出をもって同意とする。以上の5点を口頭および文書で説明した。回答後は所定の回収箱への投函により回収した。本研究は、研究者の所属する施設の研究倫理審査委員会の承認を得ている(第2014009号)。

## 4. 結果

### 4.1 対象者の属性

対象者441名に配布し、383名から回答を得た(回収率86.8%)。そのうち、尺度項目に欠損のあるデータおよび通常の学年進行の年齢±1歳とならないも

のを削除した340名(有効回答率77.1%)を分析対象とした。

分析対象とした340名の内訳は、男性62名、女性278名、1年次生84名、2年次生75名、3年次生92名、4年次生89名であった。全体の18.2%が男性という集団であった。

### 4.2 恋愛態度の因子分析

まず、恋愛に対する態度尺度の因子分析を行った。因子分析は、最尤法、プロマックス回転法により確認的因子分析を行った。因子負荷量を0.35以上でスクリープロットを参照し解釈可能な因子となるまで分析を繰り返した結果23項目、4因子が抽出された。第I因子は9項目、第II因子は8項目、第III因子は2項目、第IV因子は4項目となった(Table 1)。

第I因子は、「強力な愛は、すべての困難や障害を乗り越える」、「互いに愛し合っていれば、どのような困難や問題が生じてでも打ち勝てる」など9項目であった。これらは、恋愛はどんな障害にも打ち勝てるという信念であり【恋愛のパワー】とした。

第II因子は、「恋愛は職業や仕事のどんなチャンスよりも重要である」、「恋愛関係をうまくもてない人は、人生において本当の幸せや成功はない」など7項目であった。これらは、恋愛をロマンティックなものと捉え、人生において恋愛が1番大事という信念であり【恋愛至上主義】とした。

第III因子は、「愛情が、結婚の主な動機とされることは良いことである」、「真の愛であれば幸福感は必ず生じる」の2項目であった。理想的な恋愛を示していると捉え、【理想的な恋愛】とした。

第IV因子は、「良い結婚をする際には、相手の仲間(周囲の人)が良いかどうか、相手との恋愛関係よりも重要である」、「結婚という前提がない状態で、誰かと恋愛状態にあることは悲劇である」など4項目が当てはまった。これらを、結婚を視野にいれた恋愛であり、【結婚への恋愛】とした。

各因子の内的整合性を確認するために、信頼性分析を行った結果、第I因子の $\alpha$ 係数は0.862、第II因子の $\alpha$ 係数は0.837、第III因子の $\alpha$ 係数は0.798、第IV因子の $\alpha$ 係数は0.584であった。

Table 1 恋愛態度尺度の因子分析

最尤法による Promax 回転

第 I 因子 恋愛のパワー (9 項目) $\alpha = .862$					
12. 強力な愛は、すべての困難や障害を乗り越える	.942	-.123	-.118	-.045	
27. 互いに愛し合っていれば、どのような困難や問題が生じても打ち勝てる	.755	.034	.004	.001	
9. 真の愛は決してなくなることはなく、それはすべての障害に打ち勝つ	.731	-.039	-.060	-.081	
22. 真の恋愛状態というのは、永遠の恋愛状態をいう	.596	.006	.020	.156	
32. ある人を本当に愛したら、他にどのような要因があるにしても、その人と結婚するには十分である	.553	.060	.015	.015	
28. 私の場合、恋愛は継続し、時間とともに薄れるということはないと思う	.526	.070	.058	.023	
30. 二人の間に共通する関心がなくても本当の恋愛感情がある限り適応できるだろう	.514	-.074	.164	.006	
31. 誰かと恋愛状態にあるときには、その人以外の他の誰にも関心を持たない	.504	-.001	.070	.053	
35. 人は社会的地位に関わらず、愛する人と結婚すべきである	.470	.038	.197	-.150	
第 II 因子 恋愛至上主義 (8 項目) $\alpha = .837$					
4. 恋愛は職業や仕事上の成功のどんなチャンスよりも重要である	-.190	.946	.000	-.122	
3. 恋愛関係をうまくもてない人は、人生において本当の幸せや成功はない	-.087	.610	-.006	.148	
16. 恋愛は人生の本質である	.185	.582	.068	-.141	
40. 恋愛状態になると、愛する人に関わる事が人生の唯一の目的となる	.024	.559	.146	.127	
13. 恋愛は、あらゆる関係の中で、最も重要なものである	.437	.513	-.109	-.146	
15. もし二人の間の愛がなくなって意味のないものになるなら、他のあらゆるものもダメになる	.082	.445	-.043	.208	
6. 恋愛状態にある人は、人生における真の失敗というものはない	.011	.445	-.111	.060	
1. 恋愛は男と女の間における最も高い目標である	.222	.413	-.004	-.028	
第 III 因子 理想的な恋愛 (2 項目) $\alpha = .798$					
37. 愛情が結婚の主な動機とされることは良いことである	-.034	.021	.944	-.010	
38. 真の愛であれば幸福感は必ず生じる	.216	-.082	.639	.076	
第 IV 因子 結婚への恋愛 (4 項目) $\alpha = .584$					
25. ほぼ完全なものしか、私にとっては、“真の恋愛”とはなり得ない	.150	.054	-.068	.622	
14. 良い結婚をする際には、相手の仲間 (周囲の人) が良いかどうか、相手との恋愛関係よりも重要である	.032	-.130	.006	-.484	
29. 結婚という前提がない状態で、誰かと恋愛状態にあることは悲劇である	-.034	.181	.042	.438	
17. 恋愛感情は、ほんの一時的なもので、すぐに消えてしまう。したがって、結婚がうまくいくためには恋愛感情よりも負担や妥協を必要とする	.126	.110	-.060	-.368	
因子間相関		I	II	III	IV
恋愛のパワー	I	-	.628	.410	.369
恋愛至上主義	II		-	.203	.543
理想的な恋愛	III			-	.051
結婚への恋愛	IV				-

#### 4.3 恋愛態度因子別の性別比較

第Ⅰ因子【恋愛のパワー】については、男子学生  $2.78 \pm 0.83$  点、女子学生  $2.97 \pm 0.68$  点で女子学生の方が高い傾向がみられ ( $p=.056$ )、男子学生よりも女子学生の方が恋愛の力を求める傾向にあった (Fig. 1)。

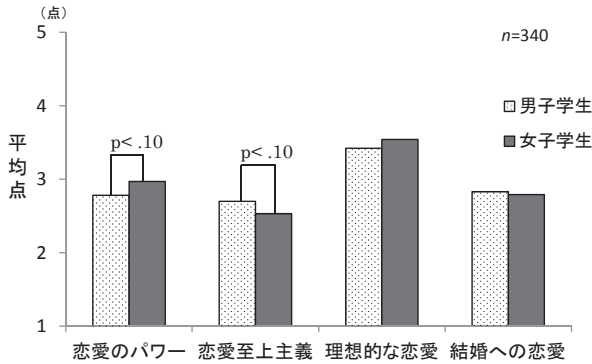


Fig. 1 恋愛態度の平均点の男女別比較

また、第Ⅱ因子【恋愛至上主義】については、男子学生  $2.70 \pm 0.75$  点、女子学生  $2.53 \pm 0.63$  点で男子学生の方が高い傾向がみられた ( $p=.062$ )。男子学生の方が恋愛をロマンティックなものとして捉えている傾向にあった。

第Ⅲ因子、第Ⅳ因子では、性差による差はみられなかった。

#### 4.4 恋愛態度因子別の学年別比較

第Ⅰ因子【恋愛のパワー】については、学年間の差はみられなかった。

第Ⅱ因子【恋愛至上主義】については、2年生と4年生との間で有意な差がみられ、2年生  $2.70 \pm 0.66$  点、4年生  $2.40 \pm 0.63$  点で2年生の方が高かった ( $F(3,336)=3.319$ ;  $p<.05$ ) (Fig. 2)。

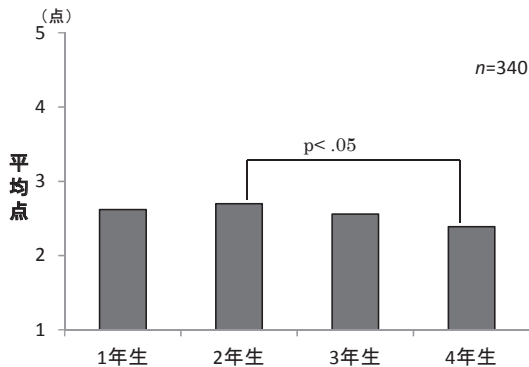


Fig. 2 恋愛至上主義の平均点の学年別比較

また、第Ⅲ因子【理想的な恋愛】については1年生と4年生の間で有意な差がみられ、1年生  $3.30 \pm 0.95$  点、4年生  $3.71 \pm 0.76$  点と4年生の方が高かった ( $F(3,336) = 3.592$ ;  $p<.01$ ) (Fig. 3)。

第Ⅳ因子については、差はみられなかった。

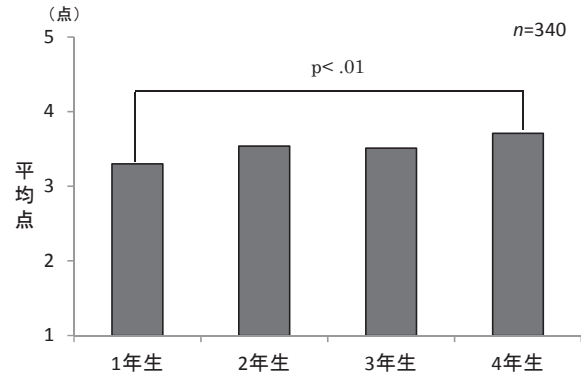


Fig. 3 理想的な恋愛の平均点の学年別比較

#### 4.5 平等主義的性役割態度

平等主義的性役割態度の得点は、男性  $3.38 \pm 0.43$  点、女性  $3.47 \pm 0.45$  点であった。男女間に差はみられなかった。また、学年別の平等主義的性役割態度の得点は、1年次生  $3.45 \pm 0.45$  点、2年次生  $3.39 \pm 0.46$  点、3年次生  $3.47 \pm 0.44$  点、4年次生  $3.51 \pm 0.43$  点であり、学年による差はみられなかった。

#### 4.6 恋愛態度因子別平等主義的性役割の高低群別比較

平等主義的性役割態度スケール15項目の得点の合計点の平均点 ( $52.03 \pm 6.29$  点) をもとに高低の2群に分けた。恋愛態度尺度の4因子について下位尺度の平均点を平等主義的性役割の高低2群間で比較した結果、第Ⅱ因子の【恋愛至上主義】では、低群が  $3.13 \pm 0.64$  点、高群が  $2.68 \pm 0.78$  点と低群が高群よりも高かった。 ( $n=340$ ;  $t=5.823$ ;  $p<.001$ )。第Ⅳ因子の【結婚への恋愛】も、低群が  $2.84 \pm 0.37$  点、高群が  $2.76 \pm 0.43$  点であり、低群が高い ( $n=340$ ;  $t=1.972$ ;  $p<.05$ ) という結果であった、第Ⅰ因子の【恋愛のパワー】と第Ⅲ因子の【理想的な恋愛】は差がみられなかった (Fig. 4)。

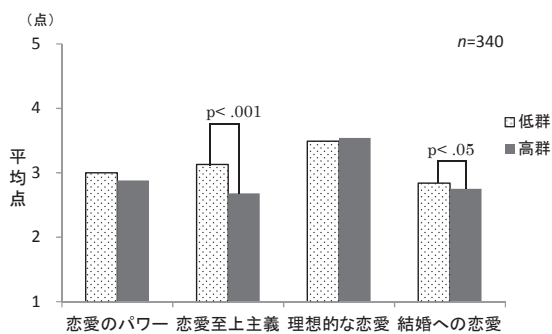


Fig. 4 平等主義的性別役割態度の高低2群による恋愛態度の比較

## 5. 考 察

### 5.1 恋愛態度の因子について

本研究では、先行文献の尺度項目の4因子について、既定の項目が当てはまらなかったが、ほぼ同様の因子であった。本調査対象者の恋愛態度は、ロマンティックなもの、力になるもの、結婚へつなげるもの、理想を抱かせるものであることが示唆され、恋愛に対する態度をみる場合の視点は時代によって大きくは変わらないと考える。しかし、4つの因子を構成する下位尺度項目においては既存の尺度と異なる結果であり、時代に即した恋愛に関する尺度表現の工夫等を考える必要がある。また、看護学生という対象者による特徴と考えることも可能であるが、この点については更に検討を重ねる必要がある。

### 5.2 恋愛態度因子別の性別比較について

男子学生と女子学生とでは有意差は無いことから、A大学の看護学生は、恋愛に関して男女差は認められなかった。

男子学生の傾向として、[恋愛至上主義]得点が高く、先行研究<sup>9)</sup>と同じ結果であった。本研究においても、男子学生は恋愛至上主義得点が高いことから、恋愛を重要視しており、純粋なものとして捉えていることが示唆された。また、男子学生は、恋愛を結婚への手段的なものではなく、恋愛そのものを大切にする傾向がみられる。これは、恋愛至上主義の者ほど、恋愛が結婚につながるという意識が低い<sup>9)</sup>という結果と一致する。

女子学生の傾向として、[恋愛のパワー]得点が高く、女子学生は恋愛を、どのような障害にも打ち

勝てるものと捉えているのではないかと考える。どのような障害にも打ち勝てるという信念は、自分一人では心細いことでも恋愛が自分自身を強くする力となり、成長させてくれるポジティブなものであると考えているのではないかと推察する。

三木<sup>9)</sup>は、女性の方が、恋愛の先に結婚を意識していることを明らかにしているが、本研究では、「理想的な恋愛」や「結婚への恋愛」では、男女の差が見られなかった。看護職における男性看護職の割合は増加しているが、未だ就業看護師の9割以上は女性が占める状況である<sup>11)</sup>。今回の結果においても男子学生の占める割合は18%程度であり、男子学生は、共に学ぶ学生も看護学を教授する教員も女性が多い環境の中で学生生活を送る。したがって女性的な行動や思考に触れる機会が多く、精神的な距離が近づくのではないだろうか。そのことが、男子学生の恋愛に対する意識に影響を及ぼしているのではないかと考える。

### 5.3 恋愛態度因子別の学年別比較について

第Ⅱ因子[恋愛至上主義]について、4年生と2年生の間で差がみられ、4年生は恋愛が1番重要だという考えが低かった。4年生は、恋愛を結婚への手段的なものと捉え、恋愛そのものを夢見心地に考えていないことが示された。大学4年生という時期は、就職を控え社会へ出る直前である事に加え、看護学生は自分自身の将来を左右する国家試験を目の前に控えている。これからの社会人生活を前に、恋愛を夢見心地なものと考えられない状況にあると推察する。

そして[恋愛至上主義]が高い集団であったのは2年生である。2年生の春は学校生活にも慣れ、実習を経験してない時期であり、看護系大学の過密なカリキュラムの中にあっても比較的、学校生活や恋愛を楽しむゆとりがあるのではないかと推察する。しかし集団の特性によるものか、学習の過密さによるものかについては更に検討を重ねる必要がある。

第Ⅲ因子の[理想の恋愛]については4年生の方

が高かった。下位項目を見てみると、「愛情が結婚の主な動機とされることは良いことである」など、結婚へつながる愛情のある恋愛を理想としていると言える。これから社会人として、結婚を現実的に考え易い状況となっていく4年生は、本物の愛情を重視した恋愛を望んでいると考える。また、恋愛自体に理想を持っており、単純な気持ちで恋愛を捉えない、人としての成長がうかがえる。

#### 5.4 平等主義的性役割態度について

性役割態度には、伝統主義的態度と平等主義的態度がある。伝統主義的態度とは男女の役割は男女で分担されるべきと考えることをいい、平等主義的態度とは、鈴木<sup>8) 12)</sup>によると、個人としての男女の平等を信じることをいう。性役割について伝統主義的か平等主義的かという点について、男性より女性が、無職女性よりも有職女性のほうが、年齢が高いより低いほうが、より平等的であると言われている<sup>12)</sup>が、本研究の結果では、男子学生と女子学生の間に差はみられなかった。昭和23年に制定された保健婦助産婦看護婦法では、看護職者は女性とされ、男子には国家試験を得る正式な資格がなかったため、従来から看護職の多くを女性が占めていた。やがて法改正により看護師の名称を獲得し、名実ともに男性看護職者の進出が可能となってきた<sup>13)</sup>。看護職は経済力・生活力のある職業であり、自立可能な職業である。したがって看護職をめざす男子学生は、女性が主となる職場に身を置くことに抵抗が少ないのではないかと考える。

近年、看護学生における男性の比率は増加傾向であるが、未だ多くは女性が占めており、今回の対象者も男子学生は2割、女子学生が8割である。また、看護学を教授する教員も多くは女性である。このような環境の中で、学生同士の身体接触や排泄の援助など、性差を意識しやすい学内演習や産婦人科の実習も、男女の別なく同じ学習目的に沿って学んでいく。このように、看護を学ぶ環境の中で、生命の価値の平等性を学ぶように男女平等の考えや看護職としての類似した価値観が育ち、性役割に対する考えの性差が小さくなるのではないだろうか。しかし女性が男性の4倍という偏った集団特性と、データ量

の少なさにより差が認められなかったことも考えられるため更に研究を重ねる必要がある。

また、年齢別の比較として学年別に比較したが差はみられなかった。これは、20歳代から70歳代を対象とした鈴木の研究<sup>12)</sup>と異なり、今回の対象者は看護を学ぶ20歳代の一定の時期であり、1年から4年という小さな年次変化では平等性についての考えは大きく変わらないと考える。あるいは学生という同一の環境の中にいることによるものかについては、今後さらに検討していく必要がある。

そして恋愛を非常に大事なものと考えて結婚を意識する態度は、平等主義的な考えを持つ人よりも伝統主義的傾向のある人の方が、高い得点であった。これは、性差を意識する考えの強いものの方が、恋愛や結婚をより強く意識するということであり、看護学生に限らず一般的な性役割志向と同じである。恋愛に対する態度は個々の経験や価値観によって決められ、職業的志向による差ではないことが示唆された。しかし今回の研究は看護学生のみを対象としているため、他の職業を志向する同年代の学生との比較を重ねる必要がある。

## 6. 結 論

- 1) A大学においては、男子学生は恋愛を純粋なものとして捉えて重要視し、女子学生は恋愛をパワーに変える傾向がみられた。
- 2) A大学の学生において、2年次生は恋愛そのものを楽しみ、4年次生は現実を考える恋愛態度がうかがえた。
- 3) A大学の看護学生は、平等主義的性役割について性差や学年差が見られなかった。男子学生は女性が主となる職場に身を置くことに抵抗が少なく、看護を学ぶ環境の中で、生命の価値の平等性を学ぶように男女平等の考えや看護職として類似した価値観が育つと推察される。しかし、男女比に偏りがある集団特性を考え、更に研究を重ねる必要がある。
- 4) 平等主義的性役割についての考えは、1年毎の変化で捉えることは難しく、学生という同一の環境による影響が強いのか、それまでに育まれた個々の価値観によるものかについては、今後

さらに検討していく必要がある。

## 謝 辞

質問紙調査にご協力いただいた学生の皆様へお礼を申し上げます。なお利益相反に相当する事項はありません。

## 引用文献

- 1) 厚生労働省 平成 25 年版厚生労働白書 - 若者の意識を探る - : <http://www.mhlw.go.jp/wp/hakusyo/kousei/13/dl/1-02-2.pdf> (2015.5.9).
- 2) 篠原さやか. 日本における結婚観の変化 -JGSS 累積データ 2000-2010 を用いた分析-. 日本版総合的社会調査共同研究拠点研究論文集 2012 ; 9 (12) : 81-92.
- 3) 第 9 回「日本人の意識」調査 (2013) : <https://www.nhk.or.jp/bunken/summary/yoron/social/pdf/140520.pdf> (2015.5.9).
- 4) 三木幹子, 植木由香. 女子大生と女子高校生の恋愛観・結婚観とジェンダー意識との関係. 広島女学院大学論集 2010 ; 60 : 95-109.
- 5) 内閣府. 男女共同参画社会に関する世論調査 (2012) : <http://www8.cao.go.jp/survey/index.htm> (2015.5.9)
- 6) 原田彩奈, 森山明美, 佐久間夕美子, 望月美由紀, 佐藤千史. 看護職志望動機に関する文献検討 40 年間の時代の変化を踏まえて. 看護展望 2014 ; 40 (1) : 79-85.
- 7) 和田実. 恋愛に対する態度尺度の作成. 実験社会心理学研究 1994 ; 34 (2) : 153-163.
- 8) 鈴木淳子. 平等主義的性役割態度スケール短縮版 (SESRA-S) の作成. 心理学研究. 1994 ; 65 (1) : 34-41.
- 9) 三木幹子, 植木由香. 女性と男性の恋愛観・結婚観に関する意識比較. 広島女学院大学論集 2011 ; 61 : 95-112.
- 10) 高坂康雅. 恋愛関係が大学生に及ぼす影響と交際期間, 関係認知との関係. パーソナリティ研究 2009 ; 17 (2) : 144-156.
- 11) 厚生労働省. 平成 24 年衛生行政報告例 (就業医療関係者) の概況 就業保健師・助産師・看護師・准看護師 : [http://www.mhlw.go.jp/toukei/saikin/hw/eisei/12/dl/h24\\_hojoyokan.pdf](http://www.mhlw.go.jp/toukei/saikin/hw/eisei/12/dl/h24_hojoyokan.pdf) (2015.5.9).
- 12) 鈴木淳子. 高学歴夫婦における性役割態度の関係 - 就労とのかかわりに関する社会心理学的考察 -. 理論と方法 1999 ; 14 (1) : 35-50.
- 13) 合田典子, 大室律子, 西山智春. 男女共同参画社会における看護教育 - 男子看護学生の動向について -. 岡山大学医学部保健学科紀要 2004 ; 15 (1) : 39-49.



# Study on nursing students' attitude towards love and sex roles

Fumiko MUROTSU<sup>1</sup> Miyuki IMAMURA<sup>1</sup> Rie FUJIWARA<sup>2</sup> Yukiko TOMOYASU<sup>1</sup>

## Abstract

For this study, a questionnaire survey was conducted targeting nursing students, who were considered to possess strong and concrete career-mindedness, at a private university in order to review their attitudes towards love, marriage and sex roles.

Among the four factors of the attitude towards love, “the power of love” tended to be higher in female students than in male students, while “love for love’s sake” tended to be higher in male students than female students. In terms of egalitarian sex role attitudes, no sex-specific or academic year-specific difference was observed and those with a strong orientation towards traditional sex roles scored higher than those who believe in the egalitarian principle in all factors of the attitude towards love.

Male students tended to place an emphasis on the pureness of love, while female students tended to be empowered by love, showing a realistic view in their attitude towards love in their final year before graduation and life as a member of society.

**Key words:** attitude towards love, nursing students, sex roles

---

<sup>1</sup> Department of Nursing, Faculty of Health Science, Hiroshima Cosmopolitan University  
5-13-18 Ujinanishi, Minami-ku, Hiroshima 734-0014, Japan

<sup>2</sup> Hiroshima City Funairi Citizens Hospital